



もうひとつの世界

第二話 褒めないで

阿部敦子 著

● 著者プロフィール
 介護福祉士、認知症ケア専門士、介護支援専門員。2013年に相模原市認知症介護指導者となる。著書に認知症介護小説『ひだまり』（株式会社ソクラ・テクノス刊、2010年版）があるほか、「幻冬舎グループ主催のエッセイコンテストで「要介護5度」が大賞を受賞し、電子書籍化

その人の世界

とりあえず筆を持ってみたい。書道なんて本当に久しぶり。

「お手本はの中から好きなものを選んでください」

若い女の子が半紙を置いていった。テーブルには私以外に三人のおばあさんが座っていて、数枚の手本を手にしながらどれにしようか迷っている。

「新緑……こいのぼり……」

それほど難しそうな手本はない。

「どれにしようかしら。これがいいかな」

隣のおばあさんが『菖蒲』という手本を選んだ。私はどれでも良かった。適当に引き抜くと、『若葉』と書かれていた。

硯を満たした墨汁に筆の穂を浸す。自分の筆ではないから言えないけれど、手入れが良くない。根本が固まっていて、穂先も割れている。使うたびにすぐに洗えばこんなことにはならないのに。

「さて……」

穂先をそれなりに整え、まっさらな半紙と向かい合う。何て懐かしいのだろう。かつては一日に何百枚も書いたものだった。あの頃の私にとって、書道は生きることそのものだった。書の道を、私は歩いていた。

ひとつ深呼吸をして、白い世界に筆をまっすぐ下ろす。手本は頭の硬いアナウンサーみたいな線の楷書だった。少し形を崩してみたくなっただけで、一枚目は素直に手本通り書くことにした。

「あれ……」

横に引いた線が、歪んでいる。手が震えてきれいに筆を運べていないのだ。久しぶりだから？ いや、そんなことではない。緊張もしていない。何だか目もおかしかった。紙までの距離がうまくつかめない。近いのか遠

いのか分からなくなって、筆が定まらなかつた。

「ちょっと……」

私は手をとめると、筆を持ったまま手首をテーブルに乗せた。自分がイメージした線とはかけ離れている。

「どうしました？」

近寄ってきた若い女の子が私を見下ろした。

「なんか……うまく書けなくて」

「筆が悪いですかね」

「いや、そういうことじゃないの」

筆のせいではない。そうだとしても、そう思ってしまったら最低だ。だって私は……。

「もう一枚ちょうだい」

「どうぞ」

女の子が半紙を差し替えてくれた。改めて半紙に向き合う。書は鏡だ。そのときの自分が文字に表れる。

筆を持ち直し、穂先に墨汁を染み込ませる。背すじを伸ばし、手本の文字を心の目でとらえる。今まさに葉を広げようとしている、萌え出したばかりの若葉。初々しくも勢いのある姿を想像しながら、紙に筆を置く。

「ん……」

書きながら、違和感を隠しきれない。今度は筆をとめないと決めていた。けれど正直なところ、一文字目を書いている途中で嫌になっていった。自分でも信じられないほど、ひどい字だった。

「だめだ……」

書き終わると筆を硯の脇に置き、私は肩を落とした。確かに久しぶりだったから覚悟はしていたけれど、ここまでとは思わなかった。これが私の字なのか。今の私の……。

「すごいですね！」

若い女の子の声で我に返る。同じテーブルのおばあさんたちも私の字を覗き込み、「上手ねえ」と言い合った。

「こんなの褒めないで。ぜんぜんすごくないわよ。ぜんぜんだめ」

椅子の背もたれに反り返り、ため息まじりに私は言った。

「そんなことないですよ！ すごく上手！」

女の子がフロア中に高い声を響かせると、残りふたつのテーブルのおばあさんたちもこちらに視線を向けた。

「名前を書きましょうよ」

女の子に小筆を差し出されると、私は首を横に振った。

「嫌よ。こんなの名前を書くの」

「どうしてですかあ。せっかく上手なのに。それじゃあ、もう一枚書きましょう」

「もういい。書きたくない」

「えーっ、どうして」

「書きたくないの」

「お手本を変えてみたらどうですか」

「今日は調子が出ないから」

「そんなこと言わないで、せっかく参加されたし」

「書かないって言うてるでしょう！」

つい、大きな声が出てしまった。女の子の肩がびくりと動いたのが分かった。

「そうですか……」

女の子は小筆を持ったまま、別のテーブルへと離れていった。私はしばらく、同じテーブルのおばあさんたちが紙の上で筆先を運ぶのをぼんやりと見ていた。

お風呂に入ると言って前の席のおばあさんが立つと、入れ替わりに若い女の子が座った。

「私も書いてみます」

女の子が筆を持ち、私はそれを黙って見つめていた。女の子の傍らには『びわ』という手本がある。

「よし……」

墨汁に穂先を浸すと、女の子は半紙の上で筆をすべらせた。のびのびとした、大胆な文字が生まれる。これが若さなのかと、昔の自分と重ねて私は目を細めた。

「あーっ、ぜんぜんだめだあ」

女の子が天井を仰いだ。私は彼女の後ろにまわると、その文字を眺めた。

「筆が寝ていたからよ」

私の言葉に相手は振り返り、瞳を輝かせた。

「教えてください！」

頷きもせず、私は彼女の横に立った。

「まず、墨汁はたっぷりつけて。毛の付け根まで十分に浸すの。そう、それくらい。穂先は丁寧に整えて。筆を立てて持ってごらんさい、そう。書くときは肘を使うのよ。手首で書かないこと。お手本全体を眺めて、形をつかみなさい。書き出したら、ためらわずに。途中で止めないで、多少のかすれも気にしないこと」

ひとつひとつ、私の言葉に彼女は耳を傾けた。あまりに素直だった。彼女が描いた線は、それが意思を持って紙からはみ出るのではないかと思うほど伸びやかだった。

「すごいいいわね」

一枚目のそれとはあまりに違う出来栄えに、私も嬉しかった。「本当ですか！」と彼女も満面の笑みだった。

「本当よ。あなたみたいな素直な生徒さんを教えるのはすごく楽しい」

「やったあ。褒められた」

彼女が新しい半紙を下敷きに乗せた。

「私にも教えてよ」

隣の席のおばあさんが私を見上げた。

「教えるってほどでもないのよ」

そう言いながら相手の隣に立つ。声が弾んでいるのが、自分でも分かった。

とにかく光代さんは、何の活動に誘っても断ってくるし、何をしても楽しくないと言う。他の方たちをただ眺めている時もあれば、近寄って来ないこともある。

「お手本はこの中から好きなものを選んでください」

嬉しくて、手本をたくさん用意した。光代さんが筆を持つてくれている。同じテーブルには光代さん以外に三人いて、光代さんより先に手本を見比べながら迷い始めた。

「新緑……こいのぼり……」

他の方と一緒に光代さんも手本を選び、一枚抜き取る。私はそれを別のテーブルから横目で見ていた。

「そうだ」

カメラも用意しなくちゃ。光代さんが他の方と交わって活動に参加する姿など、滅多に見ることができない。これまでずっと、あの手この手で活動に誘い続け、玉砕してきた。そのたびにまた頭をひねり、関わり方を変え、誘う人を変え、場所を変え、活動を変えてきた。そうやって、どれくらいの月日が流れただろう。ひよんなことから、光代さんが書道の先生だったことが分かった。その日の帰り、書道セットを倉庫の奥から引っ張り出し、どうやら使えそうだと埃を払った。企画書を書いて提出し、印鑑をもらうとすぐに半紙を買いに走った。今度こそ、今度こそ……。

「おっ」

光代さんが筆先を墨汁に浸している。くもった表情で首をかしげているのは、筆に何か問題があるのか。

「おお……」

無意識に声もれてしまう。ひとつ深呼吸した光代さんが、半紙に線を引き始める。

「あれ？」

一本引いて、手がとまった。

「どうしたんだろう……」

光代さんの手が筆を持ったままテーブルに乗っている。視線を一本の線に注ぎながら、光代さんは完全に動きをとめていた。

「どうしました？」

光代さんのもとに近寄ると、私はその線を見下ろした。さすがだ、と思った。

「なんか……うまく書けなくて」

光代さんが唇をきゅつと結ぶ。

「筆が悪いですかね」

「いや、そういうことじゃないの」

そういうことじゃない。その一言に、膨大な光代さんの思いが渦を巻いている。そう感じる。

「もう一枚ちょうだい」

「どうぞ」

私が半紙を差し替えると、光代さんは筆を持ち直して穂先を墨汁に浸した。背すじを伸ばし、手本の文字をじっと見つめている。何を思っているのだろう。

「ん……」

新しい線を引きながら、光代さんが眉間に皺を寄せる。今度は手をとめない。すべての線が空間でもつながっている。まるでやわらかな若葉が天に向かってそのエネルギーを放っているかのように感じられる無垢な線だった。

「だめだ……」

書き終えると、光代さんは筆を硯の脇に置いた。

「すごいですね！」

思わず声の音量が上がる。美しい。なんて美しいのだろう。想像以上だった。これがプロの文字なんだ。

「上手ねえ」

同じテーブルの方たちも光代さんの文字を覗き込み、感嘆の声をあげる。

「こんなの褒めないで。ぜんぜんすごいわよ。ぜんぜんだめ」

椅子の背もたれに反り返り、ため息まじりに光代さんは言った。これは光代さんのプライドの高さなのか、それとも謙虚さなのか。いずれにしても、私は褒めると決めていた。あらゆることへの意欲が下がっている方に、自信を取り戻し、楽しいと感じてもらいたい。そのためには、褒めるということが大事だと研修で学んだ。

「そんなことないですよ！　すごく上手！」

私の声がフロアに響いた。

「名前を書きましょうよ」

小筆を差し出した私に、光代さんは首を横に振った。

「嫌よ。こんなのに名前を書くの」

「どうしてですかあ。せっかく上手なのに。それじゃあ、もう一枚書きましょう」

「もういい。書きたくない」

「えーっ、どうして」

「書きたくないの」

「お手本を変えてみたらどうですか」

「今日は調子が出ないから」

「そんなこと言わないで、せっかく参加されたし」

「書かないって言うてるでしょう」

そのあらわな嫌悪に、自分の肩がびくりと反応した。どうして。せっかく褒めたのに。光代さんは鋭い目をそのままに、動かなくなった。これ以上何か言ったら、もっと怒らせてしまいそうだ。

「そうですか……」

小筆を持ったまま、私は別のテーブルへと離れた。

褒めたのに怒らせるといのは、何がいけなかったのだろう。あれから数分経ったものの、光代さんはさっきのままじっとしている。

「どうしたの」

声をかけてきたのは男性の介護主任だった。

「光代さんの字、すごく上手だから褒めたんですけど、怒らせちゃったんです」

「ああ……」

介護主任は経験済みと言うように小さく笑った。

「光代さんてさ、個展を開いたりして、作品に値がつくような先生だったんでしょ？」

「はい。ファンがけっこういて、著名人が買うこともあったみたいです。」

お弟子さんもたくさんいて

「そうかあ。それって、どういうことなの？」

「えっ？」

「いや、たとえばさ、いつものように四回転ジャンプを飛べると思っていたファイギュアスケートの選手が、いざ飛ぼうとしたらなぜか二回転も飛べなくなっていたら。どうにか飛んだ一回転を素人にすごく褒められたら」

「あ……。できていた自分が誇りだったら、今の自分とのギャップに自信をなくすこともありますね」

「そう。だからやりたくないとか」

「褒められたくもないとか」

「あるかも」と二人の声が揃った。

「そうか。まわりから見ても、本人にとってはこんなはずじゃないということもあるかもしれない。」

「でもさ」

介護主任が呟く。

「昔と同じように書けなくても、昔と同じように教えることはできるかもね」

「あっ」

自分の胸に何かが灯る。消えないうちに、確かめなくちゃ。

「私、生徒になつてきます！」

ちょうど空いた光代さんの正面の席に走る。人を褒めるなんて、私には百年早いかもしれない。